

# 歴史の再構成と経験

## 人類学的歴史について

Reconstruction and Experience of History:  
Rethinking of Anthropological History

宮下克也

はじめに

① 沖縄の門中総宗家とその子孫

② 語られる過去

③ 歴史経験の場としての儀礼

おわりに

### 【論文要旨】

「人類学的歴史とは何か」が問われて久しい。1980年代にこのテーマが議論された時、非文字を媒体に運搬される歴史、あるいは、感覚化された・される歴史の解説を目指すと考えられた。本稿では、この議論を踏まえて人類学が歴史を研究対象とする場合、いかなる戦略をとることができるのかを検討する。

そこで、沖縄県那覇市の旧都首里にある旧士族門中の総宗家とそこを自分の出自だとする人々の関係に焦点をあてる。まずは、尚王家の分家である金武御殿と自己とを結ぶ伝承がどのように語られているかを紹介する。次に名門士族の池城殿内における年中行事の一つであるウマチーの場において、総宗家と参拝者との「モノ」や「ことば」の交換の様子を紹介する。

われわれは、伝承を語ることによって、すなわち言語行為によって想起され再構成される歴史、儀礼行為によって体験する歴史、そしてその「歴史」が再構成される際に用いられている文化的・社会的コードを研究対象にすべきだと考える。

キーワード：歴史、記憶、儀礼、祖先、門中